小石川フィロソフィーⅠ
「古事記」と日本人

国語科　越智薫

1.　目 的

この世界の始まりをどのように祖先達が語ってきたのか、「古事記」の原典にふれながら読み解いていくのがこの講座の目的である。国語の教科書で「古事記」を読むことがほとんどなくなってしまった昨今だが、今こそ日本の神話の一つでも自信を持って語れる生徒を育てる意義は大きい。「古事記」編纂1300年、伊勢神宮の式年遷宮などがここ数年続き、関心を持たせる好機ともいえる。

表１　年間指導計画

４月	ガイダンス
５月～7月	「古事記」原文の音読、発表により、上巻の流れを大づかみにしていく。
７月～８月	夏期休業中の課題として、いくつかの神話の中から一つを選び、調査・研究することを課す。
９月～10 月	夏休みの課題研究を全員発表する。
10 月～11月	上巻『天孫降臨』まで音読、発表。
11 月～１月	調査・研究、論文作成 中巻『神武東征』『崇神天皇』『日本武尊』まで音読、発表。
２月	論文作成、発表準備
３月	研究発表会

2.　授業概要

上巻全てと中巻の一部を全員で音読。担当生徒が資料を用意し、内容を紹介しながら解説する。毎時間それを繰り返し、２学期終盤までに20名の生徒たちが、２回ずつ発表した。３月には様々なテーマで研究発表する。

古典の学習で音読が重要であることは勿論のことだが、文字のなかった時代から口承で語り継がれた神話や歴史物語を声に出して読む意義は大変大きい。古文を学び始めたばかりの3年生だが、大変元気よく生き生きと読めている。

3.　成果と課題

神話と日本人のつながりに気付くことができたことが最大の成果であり、生徒達がこれらを語り継ぐ気持ちを持ち続けられるかどうかが最大の課題だ。オーストラリア海外語学研修で、日本をもっと知ろうという気持ちが持てたなら幸いである。

５年後、東京オリンピックで彼らが「日本」を発信していく時、自信をもって「古事記」を語れるよう願うものである。

小石川フィロソフィーⅠ
メディア活用研究～新聞から考えるジャーナリズム

国語科　畑綾乃

1.　目 的

ジャーナリズムとは、メディアを通じて、人々に出来事を伝えたり、解説・論評したりする〈報道〉に関する全てのことを指す。メディアの多様化やツールの変化により、社会におけるメディアの構図が大きく変化している現在、人々がマスメディアの受け手であるという単純構造ではなく、人々が表現者・発信者となり受信者となる。メディアと人々の関係が日々多様化する中で、新聞についてのさまざまな知識を知り、またジャーナリズムの変化の可能性や現在の課題等について考察することを通して、世の中を見る目を育てることをねらいとする。

2.　講座の概要

（1）メディア概論

探求活動の土台作りとして、報道についての基礎知識の習得を目的とした授業を実施した。講義では、報道の基本構造及び新聞の紙面構成や制作工程等を取り上げ、投書等も行った。また、2種類のグループワークを実施した。「新聞一面作り」によってニュースの価値付けについて学ぶ活動と、「新聞社各社一面比較」によって社会を多角的に見る視点を学ぶ活動である。一面作りでは、新聞朝刊に載せるニュース素材から、ニュースバリューに応じた紙面への割り付けを行い、各グループの紙面構成の意図を発表することで発信者の意図の存在を意識化させた。一面比較では、安保関連法案の記事を全国紙とブロック紙、計6社で比較した。

（2）報道の実際

報道に携わる専門家の方から直接学ぶ場として、新聞社見学（毎日新聞・東京新聞）、NHK見学、2回の新聞記者出前授業を実施した。その中で記者の仕事の実際や、報道についての考え方を学んだ。

（3）個人調査・研究活動

「新聞から考えるジャーナリズム」をコアテーマに、各自がテーマ設定をし、調査・研究を進めた。同時に研究の進め方や、論文の書き方、発表の仕方の学習も進め、その集大成としての研究発表を実施した。

3.　成果と課題

本講座では、体験的に学ぶ活動や実際の現場の方と触れあう活動による実感を伴う学びに重きを置いている。社会全体を研究対象とすることは大変難しいことだが、上級学校におけるより高いレベルでの研究につながる論理性や探求方法の習得という点で実りあるものとなったと考える。

小石川フィロソフィーⅠ

世界の三大宗教とその周辺

公民科（倫理） 岡田芳男

1. 本講座のねらいと授業概要

宗教は、科学の発展した現代においても、世界各地で十分な意味を保持し続けている。また、本校生徒は中学3年で全員が、多様な文化的背景をもつ人々が共存するアデレードでホームステイする。国際社会を多面的に理解する上でも宗教についての理解は不可欠であろう。

こうしたことから、本講座は、宗教に関する基礎知識を与え、生徒自ら宗教について考えることを眼目として展開することとした。まず、キリスト教、イスラーム、仏教といういわゆる三大宗教の概要を、原典資料を活用した詳しいレベルで生徒に紹介し（4～10 月）、その上で、生徒自身が自分の関心から宗教の諸相を調べ、小論文にまとめる（10 月～3月）という学習形態をとることにした。

2. 生徒の研究と小論文

上述の通り、生徒自身の関心に沿った自主的な活動を求めるもので、題材は三大宗教に限定せず、神道やヒンドゥー教といった他宗教、また宗教を源泉とする文化について研究することも可とした。以下に受講生 16 名の研究テーマを挙げる。（2016 年2月現在）

- 儒教
- アンコール遺跡に見られる宗教建築・彫像
- いろんな宗教の禁止事項
- スリランカの仏教
- カトリックとプロテスタントの違い
- フランス革命における非キリスト教化について
- 宗教画から見る
- イスラム国とは
- 宗教とは ～日本人は無宗教か～
- 宗教は怖くない
- 身近に潜む宗教
- イスラム国の正体
- なぜ魔女狩りは行われたのか、
  また被害者に女性が多かった理由
- 宗教ごとに異なる死後の世界
- ゾロアスター教の意味
- エルサレムはなぜ聖地なのか

小石川フィロソフィーⅠ

裁判の変遷と裁判員制度

地歴科 中家 健

1. 目 的

古来、ことの正否を問う裁判は、ある時代には神が、ある時代には朝廷が、又ある時代には幕府が担い、明治以降は裁判官が審理に当たってきた。そうした日本の司法制度において、中世の一時期と、現代の裁判員制度においてのみ庶民が関わることができた。この講座では、庶民が裁く立場に就く希有な時代にあたり、裁判員制度と従来の裁判官による裁判が併存する、日本の司法改革の現状を学ばせることで、当事者として求められる論理的思考力、課題解決能力の修得を期した。

2. 講座の概要

上記目的を達成するために、前半部で裁判の歴史を紐解き、「裁く」とは如何なることか、「裁く立場」に就く意義について考えさせ、後半部では裁判員制度と従来の裁判官による裁判との違いについて、文献上のみではなく、裁判傍聴を重ねることで司法改革の現状に触れさせ、深い学びとなるよう、年間指導計画を構想した。

表１ 年間指導計画

4 月	ガイダンス
5 月	裁判制度の変遷について調べる。 校外学習① 明治大学博物館(裁判部門)見学
6 月～8 月	裁判制度の変遷について調べる。 校外学習② 最高裁判所・法務省法務史料館
9 月～10 月	裁判を扱った文献を互いに紹介 校外学習③ 東京地方裁判所でのレクチャー
11月～12 月	裁判傍聴報告・討論 校外学習④⑤ 東京地方裁判所での裁判傍聴
1 月	裁判傍聴報告・討論 研究報告の立案
2 月	研究報告に向けた調査・検討
3 月	講座内発表会・フィロⅠ発表会

3. 成果と課題

旧司法省庁舎（法務省法務資料館）

裁判傍聴を重ね、その報告・討論を重ねることにより、生徒の「社会の抱える矛盾・課題」に対する論理的アプローチ能力が目に見えて向上した。また、これは授業評価アンケートの「あなたは、この講座に主体的に取組み、講座に参加していますか」という質問への肯定的回答が、7 月から 12 月に向け増えた点からも伺える。

小石川フィロソフィーⅠ

数楽（すうがく）に親しむ

数学科　齋藤隆徳・中村明

1.　はじめに

本講座では、文字通り、数学を楽しみながら数学の豊かさや奥ゆかしさに触れることを目的としており、お互いが意見を出し合いながら、数学を深めていく活動を重視している。今年度も、与えられた課題を解決するだけでなく、自己で課題を見つけ、探求することで、自己学習力、数学的思考力を培うことを重視して、授業を展開した。

表１　年間指導計画

4 月	ガイダンス
5 月～8 月	JJMO の過去問題や様々な数学の題材に触れることで視野を広げる。
9 月～11 月	第１回　構想発表会 JJMO の過去問に触れると同時に、各自で研究テーマを設定
12 月	SSH 東京都内指定校合同発表会に参加（受講者全員がポスター発表）
1 月～2 月	校内発表会に向けて準備
3 月	小石川フィロソフィー校内発表会

2. 成果と課題

今年度は2講座で 29 名の生徒が受講し、バラエティーあふれる研究活動が行われた。主な研究テーマは下記である。

- 超越数　・トポロジー
- 円周率　・折り紙による作図
- 和算　・音楽と数学
- 素数　・フラクタル　など

歴史や背景を調べる研究や幾何学的内容、微分や積分に関する研究など高校・大学の内容までを含んだ、各々が関心をもったテーマを設定した。2学期には構想発表会を設け、12月には受講者全員がSSH東京都内指定校合同発表会でポスター発表を行うことができた。

また、ジュニア数学オリンピック（JJMO）には、今年度は 26 名の生徒が参加し、1名が本選に出場をした。今後の課題は、週1時間の活動の中で、さらに探究活動を充実させる指導法を確立することである。

小石川フィロソフィーⅠ

自然科学・探究活動の基礎

化学科　上村礼子・中野進一

1.　目 的

理科では、自然科学の探究の方法の基礎を学ぶ機会として本講座を設定している。課題研究を行うにあたり、自然科学領域に共通する内容を3学年段階で学び、フィロソフィーⅡの課題研究の取組が充実することを期待して、本授業の研究開発を行った。本講座を開講して4年目となる。さらに、数学の統計学を活用したデータ処理を取り入れ、教科横断した内容も実践した。

2.　講座の概要

各自がテーマを設定し、課題を解決する学習を行う前段階として、表1のような年間指導計画を展開している。

表１　年間指導計画

4 月	ガイダンス
5 月	論文とは、論文の検討、仮説、論文の検証 検証可能なテーマ、仮説の立て方
6 月	課題の把握、検証実験、結果の処理、エクセルを使ったデータ分析、考察、実験でのデータ収集・処理
7 月	エクセルを使ったデータの分析
9 月	質量の測定の利用、いろいろな現象の関連性を明らかにする、各自のテーマ検討
10 月	研究の評価（収率と誤差率）、 研究論文を読む（仮説の立て方、検証・分析の方法を批判的に読み意見を発表する）
11 月	情報や資料収集の方法、各自の課題研究 データの解析　相関係数 統計的検定 χ 二乗検定 ①　適合度の検定　② 独立性の検定
12～1 月	発表の方法、各自の課題研究
2 月	発表準備、発表リハーサル
3 月	発表会

化学実験の結果やボルトの質量測定から得られた数値を用いた結果の分析や処理を取り入れた活動も実践した。

3.　成果と課題

12月に実施した授業評価アンケートでは、「あなたは、この講座に主体的に取組み、講座に参加していますか」という質問に対して66％が「あてはまる」、34％が「ややあてはまる」と回答している。また、「目的や意義が達成されていますか」という質問に対し、59％が「あてはまる」、41％が「ややあてはまる」と回答している。学習する内容はかなり高度であるか、生徒は主体的に取り組む姿勢が高く、講座のねらいを達成している。実験を行ったデータ収集、分析、解釈の方法や統計的なデータ処理の方法について指導することは有効であると考えるので来年度も継続して実施する。

小石川フィロソフィーⅠ
スポーツ理論及び実習

保健体育科　鈴島陽介

1.　目 的

講座では、スポーツの特性を研究し、その特性を活かして生徒自身が授業を行うことでリーダーシップをとれること、コミュニケーション力、自己学習力を高めることをねらいとする。

2.　講座の概要

生徒1人で 45 分の授業を展開、残りの生徒は、その授業を受ける。受講生 20 名、すべての生徒が授業案を作成し、1回の授業を行う。

授業種目は、サッカー、バトミントン、卓球、硬式テニス、アルティメット、バレーボール、バスケットボール、ラクロス、雪合戦、フットサル、ソフトボール。

表１　年間指導計画

４月	ガイダンス
５月～６月	テーマを決めるために雑読する。
７月～８月	夏季休業中の課題として、テーマに関する書物を精読する。
９月～10 月	授業案作成
11 月～1月	授業実施
２月	授業を通しての自己評価
３月	講座内発表会・論文提出

3.　成果と課題

1学期では、スポーツの特性を研究し、テーマを選び、その目的を明確化することで、課題に対する意欲が引き立つように取り組んだ。

2学期から、それぞれのテーマで、研究メンバーに何を伝えたいかを吟味し、その内容を的確に伝えられるよう授業案の作成に取り組んだ。また、実際に指導者の立場として授業を行った。

この課題研究を通して、生徒は事前に準備してきた内容を思い通りに伝えることができないことが多かった。そして、自己評価をすることでコミュニケーションの大切さや、リーダーとして人をまとめることの難しさを知ることができた。生徒はこの研究を振り返ってそのねらいを理解することができたことで、今後の活動に期待できる。

小石川フィロソフィーⅠ
Reading for Pleasure:英語でビブリオバトル

英語科　板垣厚子

1.　講座目標

この講座の目標は、できるだけたくさんの英語の本を楽しんで読むことである。そしてその楽しさを英語で仲間に伝えることである。3月の発表会では、1 年間の学習のまとめとして英語でビブリオバトルを行う。

2.　講座の概要

今年度の受講者は男子2名女子10名の合計12名である。自由に本を選んで読むために、Oxford Press と Penguin Reader のカタログを配布する。文部省派遣英語指導教員の Harry（1学期）と Naomi（2、3学期）とのティームティーチングで授業を行った。2学期からは Naomi の「お話の読み聞かせ」が加わり、生徒はお話を英語で聞き、Q&A ゲームを楽しんだ。

表１　年間指導計画

４月	ガイダンス
５月～６月	2冊自由に選んだ本を読み、その読後プレゼンを行う。
７月～８月	夏休みの課題は、2冊好きな本を読み、Book Review を提出。
９月～11月	3冊本を自由に選び、その読後プレゼンを行う。Story Telling を楽しむ
11 月～１月	Dr. Jekyll & Mr. Hyde を読み、Book Review を提出。
２月	Matildaを読みBook　Review提出
３月	講座内発表会・Book Review 提出 発表会でビブリオバトルを行う

3. 成果と課題

3月のビブリオバトルに向けて、1学期と2学期ともに、時間をかけて読んだ本を発表する練習を行った。

しかし、本の面白さや自分の意見を英語で伝えることの難しさに、生徒は毎回悪戦苦闘することになった。声が小さい、聞いている人を見ることができない、あらすじのみを伝える、書いてきたものを読むだけ等、英語でのプレゼンテーションを成功させることはなかなか難しいことだった。

こうした英語での発表を通して、生徒のコミュニケーション能力を今後ともさらに培っていけたらと思う。